ハインリヒ・ベルの死と最後の作品

青木順三

はじめに

「棺を蓋いて事定まる」といういささか古めかしい言葉には人の世の真実が含まれていないわけではないが、昨年七月一六日に亡くなった西ドイツの作家ハインリヒ・ベルについて、このことは果たして当てはまるのだろうか。多くの作家と同じように、ベルとその作品についても、今後幾度かの変転を閲しながら、やがて或る種の評価が「定説」となって固まっていくことになるのだろうか。あるいは、これも多くの作家や思想家について決して稀ではないことだが、死後何十年あるいは何世紀もの歳月を経てのち、その再発見、再評価が始まり、後世の読者がそれぞれの「現代」に生きる糧を彼の作品の中に更めて見出す、ということも起きるのだろうか。

ベルの場合、作品の評価をめぐっても批評家の見解には大きく対立するところがあったが、殊にそのラディカルな政治的発言については、強い支持がある一方で、保守派からの反発も激しく、そのことから政治的思惑のからんだ論議の歪みが、マスメディアを通していっそう増幅され、徒らな喧騒を生むことが多かった。彼の死は、このような喧騒を沈静化させ、冷静で正当な評価は今やっと始まるということが一応は言えるであろう。

だが、一方から言えば、昨年九月二七日ケルンのギュルツェニヒ公会堂で催された追悼集会の席で、ルポルタージュ作家のギュンター・ヴァルラフが述べているように、[1] 生前にはベルの酷しい批判にさらされてもその口を

封じることができなかった政治家たちや「批評家ギルドの禿鷹たち」が、もはや反論される恐れがなくなった今、「ドイツでは死んだ作家だけがよい作家だ」というモットーに従って、偽善的な追悼の辞を氾濫させているとすれば、戦後の西ドイツの歴史を批判的に見守り続け、描き続けて来たベルの文筆活動が持っていた棘を抜き去って、彼をノーベル文学賞受賞者としての古典作家の聖徒の列に加えようとする試みもまた、今始まったというべきなのだろうか。

筆者はすでに、一九七〇年代末にいたるまでのハインリヒ・ベルについては、幾つかの研究で論じて来たので、(2) 以下の小論においては、彼の死に際してドイツの紙誌上で発表されたさまざまな文章の特徴的な論点の幾つかを取り上げながら、ベルの最晩年について検討し、次いで彼の絶筆となった長編『河のほとりに居る女たち』について考察したいと考える。

一

ベルの死後発表された多くの追悼文の中で、雑誌『シュピーゲル』に載ったジークフリート・レンツの文章は、短文とはいえ、自身も作家であるレンツが実感に依りながら一つの世代体験を語っている点で示唆に富んでいる。同誌の同じ号に載ったH・M・エンツェンスベルガーの文章『哀れなハインリヒ』も同様に味わいの深い一文だが、こちらが寓話的な語り口で、経済復興の奇跡と呼ばれる程に繁栄した西ドイツの戦後史の中に占めたベルの批判的な位置と、そこから社会との間で生じた摩擦や軋轢を、ベルへの共感と同情とをこめて概観しているのに対して、レンツはむしろ、自らのベル体験を語っている。彼は、自分をも含めた一つの世代（年齢的にはベルよりも九歳若く、レンツは一九二六年の生まれだが）の体験に、ベルは一つの表現を与えた、と述べ、次のように書いている。

「今でもよく覚えているが、初めてベルを読んだ時、私はひどく驚嘆しながら、こう自問したものだった。この作者は、私の先生のこと、私の家主のこと、私の教官のことを、一体どこで知ったのだろう。私のいらだち、そしてどうしても拒み通さずにいられないこの欲求をどうして知ったのだろう、と。彼は、私たちがどんな状態でいるかを描いてみせた。そして、そのことによってす

でに、彼は私たちに、もっと明確に生きることを、自分自身の記憶から教訓を引き出すことを義務づけたのだった。[3]」

レンツはここで、ベルの作品が戦後の西ドイツの人々、特にある世代の人々に与えた衝撃的な体験を、共感をもって語っている。それは兵士として戦争を体験した世代、日本流に言えば戦中派の世代であり、彼らは、ベルを読むことによって、自分がおかれている情況をよりよく知るようになったのだ、という。彼らは、ベルの物語のその語り口から、ある種の痛みを今までにもまして激しく感じ、自分たちに勇気がない理由も、腹立たしさには正当性があることも感じるようになった、ともレンツは書いている。そして、ベルのこのような良心の探究がたゆまず続いているうちに、彼には、他の作家たちには見られないような道徳的権威が備わるにいたったことを指摘している。ベル自身はこのことを望まなかったし、むしろしばしば抵抗した。それに、こうした事の経過の背後には、読者である人々の心の底に潜んでいた倫理的アリバイへの欲求があり、これがベルにとって快いものではなかったことにも、レンツはふれている。だが、いずれにせよ、やがて多くの人々は、何か論評や異議申立てが必要であるような事件が起きると、いつも緊張して、また時には憂慮の気持を抱きながら、ケルンの方に向かって（つまりベルの発言に）耳をすませ、聞き耳をたてるようになった。「私たち自身が発言するより前に、彼の発言を待ちかまえる習慣すら、ほとんどできてしまっていた。言わず語らずのうちに、私たちは、自分たちの希望をベルに托すことで、すでに一致してしまっていたのである。[4]」彼の同意を得たわけでもないのに、ベルを自分たちのスポークスマンにしてしまった、ともレンツは書いている。レンツのこうした記述は、作家としてある時代ないしある世代の体験を小説作品の中で見事に形象化したベルが、やがて読者にとって、単なる作家以上の存在に変わっていった過程をよく語っているように思われる。

二

ベルは、西ドイツの多くの人々にとってどういう存在だったのだろうか。今多くの追悼文の中で度々使われている用語の幾つかに、それはすでにうかがうことができ

る。それは「判断の機関（Instanz）」、「倫理的政治的制度（Institution）」、あるいは「民族の良心」といった用語である。標題に『一つのインスタンツの死』と掲げた文章の中で、F・J・ラダッツは、「ベルが書いたもの、それは決して単に文学でしかないものではなかった」と書き、また「ハインリヒ・ベルの著作の中には、すべての人間が必要とする何かが栖みついているに違いない」[5]とも記している。また「政治的見解を異にする人々にとっても、ある倫理的大きさを持った人」[6]と書いているF・J・ゲルツの一文は、『ハインリヒ・ベル――作家以上のもの――』と題されている。ケルンの十地方紙の投書欄の見出しに掲げられていた「これからは誰が私達に真実を語ってくれるのでしょう？」[7]という読者の手紙の一節は、最も端的に一般の読者の受けとめ方を示すものといえるだろう。

一九七七年に出版されたベルの全集は、全一〇巻中、評論・エッセイ・講演等が三巻を占め、さらに別の一巻はインタビューを集めて七五〇ページ近い大部なものである。しかもこの巻の標題は『インタビュー　I』となっており、今後もっと網羅的な全集が編まれることになれば、これらの直接的発言はさらに膨大な量になることが予想される。ベルはそれほどに多く、事あるごとに発言を求められ、それによく応え、そして彼の発言に多くの人々は事実耳を傾けたのである。その理由はどこにあったのだろうか。

彼の評論やエッセイの文章は、明快な論理に導かれた理づめに説得的な文章ではなく、またいわゆる達意の文章であることは疑う余地はないにしても、練り上げられた完璧な修辞の魅力を湛えた「名文」では決してない。にもかかわらず、ベルの文章の持つ魅力とその説得力は否定しがたいものがある。その理由の一つとして、ある問題に対する反射的感覚的な受けとめ方、特にインタビューの場合、問いかけられた問題への咄嗟の反応の中に自然ににじみ出て来るベルの率直で飾り気のない人柄の魅力のようなものを挙げる必要があるように思われる。この点について多くの人々が語っているが、特にライヒ＝ラニツキの追悼文の中の次のような指摘が注目に価する。彼はここで、彼がまだワルシャワにいた一九五六年当時、西ドイツから訪れた新進作家ベルに初めて会った時の思い出を語っている。

「すぐに感じられたことだが、この全く飾り気のない人物は、誰にも何もとりつくろって見せようとはしなかった。疑いもなく、彼には驚くべきカリスマ性が備わっていた。それは極めて稀にしか存在しないもの、即ち、自然さと誠実さとが非のうちどころなく一体化した時に生じるカリスマ性である。ベルは信頼できる人だった。生涯の最後の日にいたるまで、彼は常にそうだったのである。[8]」

早くからベルの文学に関心を寄せ、しかも晩年のベルの作品については、最大限の言葉で酷評を浴びせた批評家の言葉であるだけに、この記述はいっそう興味を引かれるが、同様なことは、次のヨアヒム・カイザーの言葉からもうかがえる。

「ベル自身が、個人的な会話の中で、公的な立場で、また多くの関心を集めた高名なノーベル賞受賞者として、いつもきまって静かに語り、常套句を軽蔑し、公的な決まり文句の背後を見通していたということ、彼が、もちろんカトリックの支配層をも含めて、上流の喧しい連中をきびしく拒んだこと、これはベルの場合、決して何らかの文明批評的な立場から生まれたものではなかった。それは決断の問題ではなく、左翼的ないし進歩的な決意の問題などでは全くなかった。彼は要するにそのようにしかできなかったのである。（傍点引用者）[9]」

こうした率直で素朴な語り方の持つ説得力は、特に直接ベルと接した場合に大きかったのだろうか。印刷された文章として、活字を通してインタビューを読むことしかできない者には、必ずしも十分に感得できないうらみがあるのだが、特にこの点については、ライヒ＝ラニツキが、別の関連の中でも語っている。彼は、ベルが諸外国、特に東ヨーロッパやイスラエルですら大いに歓迎され、新しいドイツの代表者と見られるようになった理由を、第一にベルが描いた作品の主人公たちの性格的特徴、第二にベルの時評家としての原理的主張が読者の共感を呼んだことを挙げた上で、次のように書いている。

「そして最後に、第三のファクターとして、これは定義することがはなはだ困難なのだが、しかし言及しておかなければならない。ベルの人柄からにじみ出て来るもの、私的な交際でも、公的な発言の時にも、それに、もちろんテレビのブラウン管を通してさえ、にじみ出てくるもの、よく過去の俳優について噂される『発散するも

の』が彼の行く手に道を開き、遂には彼の作品が広く読まれるようになるのを助けた、ということなのである。[10]」

ライヒ＝ラニツキは、ここで、賢者ナタンの寓話にある黄金の指輪、つまり所持する者に、神と人とに好感を持って迎えられる秘密の力を授ける指輪、ベルの場合でいえば人に信頼感を呼び起こす力を授ける指輪を、ベルは持っていたという言い方すらしている。いささかイローニッシュな響きを伴わないでもない表現だが、ベルをよく知る人の言として、すくなくとも一面の真実を語っているものに違いない。

三

ベルは、こうした独特な率直さで、社会や政治の危険な動向に警告し続けたことは周知のとおりである。そして、このような彼の発言が持った説得力の今一つの大きな理由として、ベルが作品を通してではなく評論や講演の形で直接的に発言する際にも、常に作家ベルとして、イメージをもって語ったということ、そしてそのイメージの鮮烈さが読者に強い印象を与えたことが挙げられる。その典型的な一例が、ベルのおそらくは絶筆であったと思われる小文の中に見られる。

それは昨年六月八日付の『フランクフルター・ルントシャウ』に載った『身許不明者たち』と題する一文である。この中で彼は、まず五月八日の第二次大戦敗戦の記念日にヴァイツゼッカー大統領が連邦議会で行った演説を賞賛して、これをナチス国家の歴史を考えるための序論として学校の教科書に採用すべきだろうと書いている。そしてこのあと、レーガン大統領が訪れようとした無名戦士の墓地に親衛隊員の墓が含まれていたことから問題となった例の事件にふれ、またその墓前での西ドイツとアメリカの二人の将軍の握手という演出過多の情景（紙面にはこの写真が添えられている）と、そこに見え透いている意図を辛辣に批判している。そして、レーガン大統領もコール首相も戦争の実態は何も知らず、また、二人の将軍も、兵士の死が英雄的なものであることなど滅多にないことを決して知らない、と指摘したあとで、ドイツ語で「戦死」を意味する im Krieg gefallen という表現にふれて、次のように書いている。

「生き残った人々は、戦場にたおれた（gefallen）という言葉にかくされているまやかしにふけり、このまやか

しをさらに人にも伝えていく。戦場にたおれたという言葉、それは彼らが戦闘と突撃の最中に頭部銃創を受けてその場にたおれて死んだかのような響きをもっている。だが衛生兵や軍医や看護婦はもっとよく知っている。殺された兵士たちの叫び、呪い、蠢めき、それにまた祈りや、いまはの際の言葉を――妻や恋人や母を呼ぶ叫び声を録音した数千時間ものテープがもしあったとしたら、それは全世界のロックバンドやポップスの騒音を圧倒することだろう。そしてこのテープを非常に長い時間、多分一年間もの時間をかけて、それも極めてゆっくりと聞かない限り、瀕死の兵士の最期の言葉として祖国とか総統とか民族とかいった言葉を聞きとることはできないだろう……。」(11)

ベルはまた「無名戦士」という言葉にもまやかしがあって、これは、本来は戦争による身許不明の死者と呼ぶべきものを美化する用語ではないのか（この一文の標題ばこのことを指している）とも書いているが、ベルがここで描き出している録音テープのイメージはまさに比類のない鮮烈さを持つものであり、その衝撃力は彼の初期の短篇小説の世界を想起させる。敗戦後四〇年を経て、過去を忘却して軍備拡大の進度をいっそう速めようとしている権力者たちの危険な傾向に、最晩年のベルが、今一度いかにもベルらしい形で警告をつきつけたと言えるであろう。

四

一九八二年秋、ケルン市議会はベルにケルン市の名誉市民の称号を贈ったが、この時その賞状の文言をめぐって市議会の中で論争があった。ベルの死に際して、この地の地方紙の幾つかはこの問題を想起している。最初にＳＰＤ（ドイツ社会民主党）の党員であるノルベルト・ブルガー市長の側が用意した文案には、名誉市民の称号は「国際的な卓越した作家であるノーベル文学賞受賞者」であるのみならず、「自由および言論の自由の勇敢な擁護者であり、かつ社会の誤った方向への発展に対して積極的な参加をもって批判的に監視する人」であるハインリヒ・ベルに対して贈られるもの、とされていた。これに対して、野党ＣＤＵ（キリスト教民主同盟）の側から作家ベルの業績のみに限定しようとする異議が出て、後段の削除を求める動きとなったのが、この論争の発端

だった。これに対して、ベルはこうした限定を拒否する意向を示したとされ（当時のケルンの新聞には、「ベル文案論争に立腹」などという見出しも見える）、市長の努力によって、最終的には次のような文言で落着した。すなわち、「国際的な卓越した作家であるノーベル文学賞受賞者ハインリヒ・ベルに対して、その人物を評価し、また彼の文学作品および作品にも表明されている彼の社会的政治的参加（アンガージュマン）の全領域を評価して、彼の故郷ケルン市の名誉市民の称号を授与する」[12]というものである。

この回りくどい文章は、政治的妥協の文章として、洋の東西を問わない曖昧な表現を含み、その限りでも興味がなくはないが、こうした事の経過を通じて、ベルのラディカルな政治的批判に好感を持たない保守派の人々が、ベルの作家としての創作活動と、社会批評家、時評家としての言論活動とを意図的に分離し、前者のみを評価して後者を否定しようとしたことがよく示されている。この立場は、ベルの死を報じた際の『ヴェルト』紙に載ったギュンター・ツェームの文章にも、更に明瞭に読みとることができる。

ツェームは、「追悼の文であるとはいえ、このことは黙っているべきではない」とあえてことわりながら、七〇年代におけるベルのテロリズムに対する「曖昧な態度」への当時の非難を今また繰返し、さらに、西部ドイツ放送のような「批判的メディア」が折あるごとに発言を求めたために、ノーベル賞受賞者としての強力な名声と相俟って、ベルの中に「奇妙で独特な権勢コンプレックス」が育ってしまったに違いない、とまで書いている。このような悪意は、『ヴェルト』が、かつてベルをテロリスト同調者として誹謗したシュプリンガー系の代表紙であることを考えれば不可解ではないし、却ってベルの社会的発言の影響力の大きさを裏付ける証言とも看做せよう。ツェームは、こうした関連で、ベルにおける政治の過剰が彼の文学の衰退を招いた、と批判したあとで次のように書いている。

「後世はこの点でも多くの視点を正すであろう。政治家ベル、モラリストベルに対して、もっととらわれるところのない見方を可能にし、ベルの専ら文学的な功績を『参加の文学』（リテラテュール・アンガージェ）の過ちからもっときっぱりと切り離すことだろう。ドイツの芸術のパルナスに彼が優に目立った地位を占めることは確かなのである。」[13]

これは、ヴァルラフが慨歎し非難した偽善的追悼文の好例といえるが、それだけに、ベルに対する一つの見方が浮き彫りにされていると言ってよい。

一方、ベルの反体制的立場とその政治的発言に共感し期待するあまり、彼の作品についても専ら主題にのみ注目して、それが文学作品であることを視野の外におくような議論や、あるいはベルの善意や政治的倫理的立場は評価するが、作品については、ほとんど論評にすら価しないかのように軽視したり、酷評したりするという類の批評は、七〇年代半ば以後、特に七九年の『行き届いた管理体制』をめぐってはかなり顕著に見られた。これはH・フォルムヴェークが指摘しているように、ベルがノーベル賞を受賞したことによって、一方ではその文学的地位はいわば国際的に確定ずみの当然の前提であるかのような観念となり、また他方では、存命中からすでに古典作家として完成した精選ずみの傑作のみを生み出してほしいという期待が生じた結果であるのかも知れない。[14] いずれにせよ、晩年の十数年間、少くともマスメディアに現れた限りでは、ベルについての議論は、支持するにせよ非難するにせよ、主として彼の道徳的政治的立場や発言をめぐるものが前景に押し出され、作家ベルの問題を覆ってしまっていた。従って、F・J・ゲルツの次の問いかけは、『ヴェルト』のツェームとは逆の方向から、こうした傾向への疑問を提示したものといえるであろう。

「ベルについて、もし作家としてよりも政治的ジャーナリスト、アンガージュマンの社会批評家、反抗的市民としてのベルをより高く評価するとしたら、作家よりもエッセイストを、芸術家よりもコラムニストを評価したりしたら、これは著作家であるハインリヒ・ベルに対してはなはだしい不正を加えることになるのではないだろうか。いや、そもそもこれは二つに分離することができるのだろうか、審美的な配慮と現実政治的な判断とは。[15]」

五

ベル自身は、作家としての創作活動と時評家としての発言とを分離しようとする立場をきっぱりと拒否していた。このことは、彼の生き方そのものが明確に示していると言ってよいのだが、特に、名誉市民の称号を贈られた時の謝辞の中で、すでにふれた文言論争にあえて言及する形で述べている。彼はまず、文学作品の作者、つま

り小説家、作家と、時には論文や評論を書いたり講演をしたりする人とを分ける考え方が、そもそも「論文や評論、講演もまた文学であることは別としても」自分には全然理解できない、と述べている。このような考え方は「教養上の誤解であって、これは決して私たちドイツ人にのみ固有というわけではありませんが、ドイツ人には特に深く根を下ろしているものです。」そして、ベルはさらに、「論文や評論や講演がもし十分に腹立たしいものであるなら、そうしたものの文学的な面、まあ言ってみれば詩的な面こそが、まさに危険な点なのです。文学的詩的な面は日常政治的な用語から抜け出し、抜け落ちるからこそ、そうなるのです、」[16]と述べている。彼は、同じ謝辞の中で特にこの点を強調して、「もう一度言いますが、論文とか政治冊子(パンフレット)とかにあっては、その詩的な面こそが、政治の日常用語から外れた言語表現こそが、危険な点なのです、」[17]と繰り返している。「危険な」とは、毒を含んだ、と言い替えてもよいであろうし、「根源的に」の意味でラディカルに批判的であることと言い替えてもよいだろう。ベルはこの講演の中で、一般には無害視されている古典作家たちの作品がいかに「危険な」ものであるかを例示してみせているが、右の言葉は、最晩年におけるベルの、自分はなによりも作家であったこと、作家としてラディカルな批判者であったことの宣言と解してよいのではないだろうか。この彼の立場からすれば、彼が書くもののジャンルが小説作品であるか評論や講演であるかは、第二義的な意味しか持たないことになるのかも知れない。

H・フォルムヴェークは、先にも引用した追悼講演の中で、次のように述べている。

「彼は何よりも先ず作家であった。彼は、人間の現実を見る彼の見方を作家として獲得した。彼は作家として危地に身を投じた。書くことが、彼にとっては、個人と社会との大抵は隠された真実を、人間的な真実を見付け出し、目に見えるものにすることを意味した。それ以外のことはすべて、その結果として生じたのである。[18]」

そして、戦争と戦後の廃墟の中での兵士たちの恐ろしくもまた無意味な生や、戦後の日常の中での零細な庶民の苦しみや絶望を描く作家として出発したベルが、やがて「物語りながら、これこそリアルな真実なものとして認識したことを、世の風潮に逆って擁護せずにいられな

い気持の衝迫」から、論文や評論、講演等の直接的発言に向かうようになった、と書いている。これは、差し当たりは時間的経過を指摘したもので、ベルがなぜ五〇年代に廃墟の文学への信条告白を語り、若いカトリック信徒への手紙の形で教会と国家との危険な癒着やそこから生じた偽善を攻撃せずにいられなかったのかを明らかにしている。しかし、そればかりではなく、ベルの内面における作家ベルと時評家ベルとの必然的な関係をも示している。

フォルムヴェークが、ベルの余りにも早過ぎた死を迎えた今、せめておくればせながら、このこと、つまりベルが何よりも作家であり、「物語りながらこれこそリアルな真実なものとして認識したこと」がベルの出発点であったことを、今一度明確に意識しなおすべきだ、と述べているのは、ベル理解のための正当で重要な指摘といってよいだろう。

但し、問題は残っている。すなわち、七〇年代のシュプリンガー系ジャーナリズムとの泥沼のような長い闘いに身心を消耗させながら、ある種の使命感に駆られていっそうラディカルな批判を強めていったように思われるベルが、晩年、殊に『カタリーナ・ブルーム』以後の作品にあって、作家であるはずの時にも時評家であり過ぎたことはなかったか、という問題である。もちろん、それは、ベルが意識的にその立場を選択することを恐れなかった、ということではあるけれども。

六

ベルの死の約一ヶ月後に出版されて最後の作品となった長編『河のほとりに居る女たち』[19]の場合、さらに別の事情が加わる。彼の生涯が、前年秋に出た弾劾のための編著『ビルト＝ボン＝ベーニッシュ』ではなく、この長編小説によって結ばれたことに、筆者は何かしら心安まる思いがなくもないのだが、それはともかくとして、ベルがこの作品を完成作と看做していたか否かについて、すでに二説がある。すなわち、『ヴェルト』紙のG・ツェームは、ベル自身が原稿を完結したものだと人に断言していたと書いている[20]のに対して、一方『フランクフルター・アルゲマイネ』紙のライヒ＝ラニツキによれば、ベルは、原稿を出版社に渡した直後に、電話で（明記されてはいないが、ライヒ＝ラニツキ自身に、なのだろう

か)、あの本はまだ完成したとは到底言えないもので、まだまだ時間をかけねばならず、ゲラ刷りの段階で綿密に訂正し、できれば全面的に手を入れようと決めている、と語った[21]という。しかし、彼の健康状態はすでにそれを許さず、校正刷りを読み、何箇所か訂正もしたが、予定していたように全面的に手を入れることはできなかったのである、と。どちらが事実であるか、もはや確かめるすべがない以上、現に出版された形のものとして受取る以外にないが、こうした成立の事情は、すくなくとも無視できないし、作品自体にその陰が感じられることは否めない。

ことに、この作品が、時たまト書が挿入される以外には、小説のいわゆる地の文は一切なく、もっぱら対話と独白のみで一貫する形式をとっていることに異和感を抱く評者もいる。しかも、これがおそらく舞台での上演を予定した戯曲ではないことは、副題になっている「対話と独白による小説(ロマン)」という著者自身の規定にもうかがえる。従って、これはむしろ本来は小説のための腹案と看做すべきものだ、とネガティヴに評価する点では、右に引用した二人の評者の見解は一致している。事実、ライヒ＝ラニツキが指摘するように、この形式から生じた無理が目立つ箇所もないではない。しかし、にもかかわらず、この小説は、彼の全作品系列から抜け落ちた例外的作品では決してないどころか、作品のモチーフも、作者を内面から動かしている衝迫も、語り口も、イメージの鮮明さも、やはりまぎれもないハインリヒ・ベルの作品である。それは登場人物に過去の作品中の人物の面影があるとか、たとえばローベルト・フェーメルの修道院爆破のテーマが再現している等の個々の部分的類似の問題ではないのである。

この小説の梗概を示すことは、はなはだ難しい。多数の登場人物は群像であって、その間に比重の多寡は当然あるにしても、主人公は特定しにくい面があり、交錯するさまざまな主題は、個々の挿話的事件の並行的継起であって、全体の流れとなるような骨太なストーリーの展開はないからである。しかしながら、それらが全体として一つの社会(それは現在の西ドイツ社会にほかならないが)の情況と、そこに内包されている問題を示していることもまた確かである。

まず、ここには、支配を維持するためにはいかなる汚

れた手段もためらうことのない腐敗した保守政治家の群像がある。さらにナチス時代にはユダヤ人殺害に乗じて資本を肥やし、今は宇宙兵器と覚しきものの株を操作して利潤の拡大をはかるといった、政治家以上に悪辣な、しかし自らは高雅な趣味に身を包んで決して手を汚すことのない、金力による支配者たちがいる。一方、このような社会の現状に嫌悪と反感を抱き続け、屈折した抵抗を続ける人々、あるいは自ら既成社会からドロップアウトを敢行する人々、真実を偽ることを肯んじないために狂者の扱いを受けたり、遂には自ら命を絶つ人々、特に女性たちがいる。また、既成の偏見や法と秩序、それにキリスト教道徳の枠には初めから無縁な底辺の世界で、しかも自信を持って生きている、これも女性たちがいる。

こうした中で、最も強烈な個性は、四四歳のエルンスト・グロプシュであろう。この人物は、貧しい労働者の家の出身で、強い上昇志向と闘志から苦学して弁護士になり、あえて反体制派ではなく保守派の政権党に身を投じている。そして、大臣プルカンスキーの秘書兼選挙参謀兼演説原稿のゴーストライター兼演出者をつとめている。彼は、テレビ写りのよいことが唯一の取り柄で、精神的には稀に見るほどに完全に空虚なこのプルカンスキーを、人間としては軽蔑しきっているにもかかわらず支え続け、遂に党の代表的な政治家の一人に仕立て上げたのである。このように一見シニックな道を選びながら、彼の真の改革への政治的情熱は止みがたく、また金持階級に対する庶民的反感は強烈である。こうした事情を描いた第六章は、小説全体の中でも特に生彩に富んでおり、この点に関してはかなりの評者の見解は一致している。グロプシュは、銀行家カプスペーター家の優雅な調度や骨董品等々に満ち溢れたサロンでのファミリーコンサートで演奏されたベートーヴェンを聞くうちに、日頃の憤懣が爆発点に達して「形而上学的悪寒」(一二二)に襲われ、一晩中うなされ続ける。その間彼は「ベートーヴェンは彼らのものじゃない。何もかも取り込んだ上、ベートーヴェンまでわがものにしようというのか」(一一八)とわめき続ける。このグロプシュ像には作者の共感がかなりに感じられる。[22]

この小説全体を貫く縦糸のような主題として、数年前から、いずれも富裕な銀行家の家の、しかも由緒ある高

価なグランドピアノが、夜半何者かの手で破壊されるという奇妙な事件が継起している。カプスペーター家のグランドピアノも最近その難に遭ったのである。犯人と覚しき人物は、証拠は上らぬながら、カール・フォン・クライル、すなわち老政治家ハインリヒ・フォン・クライルの息子であるらしい。カールはかつて有能な新進の外交官だったが、あえて脱落の道を自ら選んだ三八歳の人物である。しかし、このカールの奇矯なピアノ破壊の行動に共感を示す人々が徐々に増していく。彼の別れた妻で、今はグロプシュと同棲しているエーファ、グロプシュその人、政治家のヴープラー夫妻(後述)、そして善意の老銀行家クレンゲル。クレンゲルは、この行動を「音楽を欺くことに対する、ぜいたくと飢渇と戦争とあらゆる悲惨と、あらゆる形式の物質主義に対する、天から下されたプロテストのようなものです」(一九一)と解釈して、自分の家のグランドピアノの破壊を依頼しさえする。

今一つ、含意の多いエピソードの一つとして、ライン河畔にある地所と廃屋の話がある。この地所は、親子二代がいずれもアウシュヴィッツとトレブリンカの強制収容所で殺害されたユダヤ人の土地だった。今、中東のオイル・マネーによる大富豪がこの土地の入手を望んでいる。そして、グロプシュが辛うじて探し出してニューヨークから招いた相続権者、一五歳のイェレミアス・アルクロースは、余裕のない生活にもかかわらず、自分はこの荒れ果てた廃屋と地所を決して売却しない、「汚点として、あるいは記念碑として、または汚辱の記念碑として」(二一〇)このまま永遠に保存しておく、と主張する。そして、この言葉に真っ先に賛意を表するのが、やはりエーファ、この感受性とやさしさに富んだ女性、しばしばラインの河面を眺めながら、ニーベルンゲンの神話以来の時の流れに空想を馳せる想像力の富かな、女性的原理を体現する三六歳の女性なのである。

七

過去の作品でもしばしばそうであったが、右のエーファの例にも見られるように、この作品でも、女性たちが果たしている役割は大きく、救い難い社会の現状の認識も、その批判への原動力も、未来へ向かっての積極的な動きの萌芽も、多くは女性から出ている。題名も暗示す

る如く、この作品は女性の群像でもある。そうした女性たちの一人に、エリカ・ヴープラーがいる。そもそもこの小説の発端は、主要な政治家の一人で、彼女が妻として陰に陽にこれまで支えて来た夫のヘルマン・ヴープラー（夫妻は共に六二歳という設定になっている）に、彼女が協力を拒むことから始まる。それは、大聖堂で柩機卿のもと壮麗豪華に催されるエルフトラー＝ブルーム（アデナウアーを想起させる人物）の死後二〇年を記念する壮厳ミサへの出席を拒む、という行動である。このミサは、テレビ中継も予定され、宗教行事というよりは第一級の政治的行事であって、欠席はスキャンダルの種にもなりかねない。そのことを承知の上で、彼女はあえて出席を拒む。それは、前夜、彼女の家で開かれた政治の黒幕や党幹部、それに今や着々と復権を計りつつある旧ナチスの、血塗られた過去を持つ男などの陰謀めいた秘密の会合を盗み聴きした彼女が、ことの不正と腐敗に耐えきれなくなって、「もう沢山よ、ベルマン、もう沢山だわ」（二一四、二一五）と言い始めたのである。彼女がミサに欠席したことは、やがて夫のヘルマンにも深刻な懐疑を呼び起こす。キリスト教とは何であるべきかを決めてきたのは、エリカやその他の人々ではなく、結局あの人たち（ベルはここでは明示的に名を挙げてはいないが、彼のこれまでの数多くの発言から見て、これが名称にキリスト教の名を冠したCDU＝CSUの政治家たちおよびこれと結んだ公的教会の人々のことを暗示していることは疑いない）だったのではないか。現実において間違っていたのは自分たちの方だったのではないか、という疑念を、彼は妻に語るのである。それだけではない。ハインリヒ・フォン・クライルも、エリカが欠席した教会の中で今さらのように感じた空虚さ、自分自身の空虚さを告白する。これに対して、エリカは、次のように語るのである。

「あの人たちがここに集まった時私は盗み聴きをしてしまったんです。お分かりでしょう、誰のことだか……。夜通し眠れなくて、死んだ人たちのことを考えていました。兄のこと、両親のこと、それから戦後の四〇年間のこと。それに私が出席して来た壮麗なミサすべてのこと。私はいつも最前列で、いつも一番前で――そうですわ、トップを切って、これ見よがしに、と言いたいくらいですわ。時にはファーストレディの代理をつとめる一種の

セコハン・レディというわけですよね。私はこれまでは楽しんでいました。貴方と同じです。教会へはいつもすすんで行っていましたし、夕べの礼拝にも大抵は出席していました。でも昨日、私は不安になったのです。これ見よがしな代表者の役割に踏み込むことが……」(二三〇)

彼女はまた、次のようにも語る。

「貴方がなぜそんなに不安なのか、わかりますわ。『彼』がいないから、貴方が探し求めていたその人がいないからなのです。彼らが、彼を放逐してしまったのです。聖変化の時にも彼は来なかったのです。彼らが皆それほど罪深いから、骨の髄まで腐敗しているから、ではありません。それは今始まったことではありません。そうではなくて、彼らが自分の罪を全然感じないからなのです。彼らは汚職をしますし、ロケット配備を歓迎しますし、死を礼讃します。どれも皆今始まったことではありません。今までなかった新しいこと、それは彼らが何の責任も感じない、もはや全く何の罪も感じないということなのです……。」(二三二)

エリカが過去数十年の習慣を破り、夫に期待されていた役割からあえて脱落した結果、このような、疑いは抱きながらも結局は日常生活に埋没し、現実を追認して生きて来たいずれも社会の上層に位置する人々が、教会の中の空白という形で、自己の精神の空洞に突然気付くのである。老銀行家クレンゲルもまた同じ思いに捉えられる。

カールの奇行の理解者が増し、エリカ・ヴープラーのミサ欠席が呼び起こした波紋が拡がって行くこと、ここには最晩年のベルが読者に伝えようとしたメッセージ、一九七九年の長編『行き届いた管理体制』とも共通な一つのモチーフを読みとることができるのではないか。それは、もうこのあたりで立止まって、日常的生活の流れにただ順応して流されていくことの罪深さ、あるいは結果の重大さを、考えなおしてみること、戦後四〇年間歩んできた既定のコースから一歩外へ踏み出してみること、一言にしていえば、ドロップ・アウトのすすめ、とでも言えばよいものではないだろうか。

八

この作品では、信仰とカトリック教会との問題が再び

大きな位置を占め、この問題に対する姿勢の差違は出身階層の違いと、さらに大きくは年代の違いによるものとして描かれている。六〇代以上の、ベル自身の世代に属し、多少とも彼の分身的な性格を持つものとして描かれた人物たちにとって、教会は彼らの人生を深い奥底で律している真正な信仰の場である。だからこそ、同年代や五〇代の手の汚れた政治家が汚れた手のままで信心深く振舞うことに、彼等は耐えられぬ思いを抱くのだし、エリカのように、枢機卿の誰一人として原爆やロケット配備に反対の声を挙げなかったことに深い失望を感じる者もいる。しかし、グロプシュやカール等四〇歳前後の人人にとっては、豊かな少女時代をカトリック系の学校で甘やかされて過したエーファを除き、教会はすでにそのような身近な存在ではなく、真剣な精神的対決の対象ではなくなり始めている。カールは「この国では教会はもう用済みになった」（一八六）とすら言う。そして、更に若い三〇歳の女性で、カールと同棲中のカタリーナは、エリカが歌う古い聖歌に何の感動も示さず、逆境に生まれ育った二〇歳のローレに至っては、教会は偽善の塊でしかなく、反感と、時に憎悪の対象に過ぎない。ベルはローレの口を通して、こうした偽善や、法と秩序の欺瞞性に対する庶民の怒りを今一度爆発させている。

ベルは、グロプシュ以下の若い世代の傾向（その中には「教会離れ」のほかに、形骸化した法的制度としての結婚という形式の無視もあるように思われる）に理解を示す一方では、自分と同世代のエリカに、「カタリーナのような娘が教会のことを耳にするだけで身ぶるいするなんて悲しいわ。でも私には、あの娘がもう少し年を取ってカールと息子と三人並んで静かに額づいている姿が目に見える」（二一六）と語らせて、やはり存在するはずの「彼」（即ちイエス・キリスト）への信仰に立ち返ることへの期待もにじませている。ベルがカトリシズムを攻撃したのは、「彼が非カトリックだったからではなく、まさに、彼がカトリックであり過ぎたからである、」[23]と言うヨアヒム・カイザーの言葉は、この作品によっても再び三たび確認されているといえるだろう。

小説の最後の章は、老銀行家クレンゲルの淋しい独白が中心になっている。彼の妻は、生前、強制収容所のガス室の写真を見て以来、シャワーが浴びられなくなり、また金製の装身具を一生身につけることができなかった。

だが、「あなたには本当にわかるのですか、これが殺された人たちの金歯、あるいは殺害の前に抜き取られた金歯の金で作られたものではないことが」(二四九)という彼女の言葉を聞いて、こうした想像力を持つことと持たないことと、そのどちらが人間的に正常かを自信をもって判定できる者がいるだろうか。こうして、クレンゲル自身も金の取引ができなくなる。それは銀行家として失格であり、事実彼の銀行は経営が傾き、あくまで紳士的だが老獪で手段を選ばぬカプスペーターの銀行に吸収されてしまう。娘のヒルデも、「ここで生きるよりはニカラグアで死にたい」と言って、国外へ去って行く。この老クレンゲルの「鉛色の人生」という語がこの作品の最後を結んでいる。

ベルのこの最後の作品の欠陥をあげつらうことは容易である。そして、ベル自身がすでに一九六六年に語っているように、「ある作家が、彼の(その時々によしとされている)思想のゆえに賞賛され、形式の方は大目に見られたり、あるいは形式が十分に評価されなかったりすれば、そこには欺瞞が生ずる」[24]ことは事実である。しかし、この作品の場合、読む者の心を捉えるのは、やはりどうしてもそのような関心ではない。

この全編を覆う暗さ重苦しさは何だろう。それは、病み、疲れ、年齢よりもはるかに年老いていた晩年のベルの暗さであるのか。それとも時代が彼の心に生み出した暗さであるのか。あるいはむしろ、彼は時代のゆえにこそ病み、疲れたのではなかったか。「彼は傷つきながら生き、烈しく筆を振るった。彼は文学的な《トリック》などますます軽蔑していた。自分の声に反響が返ってくる可能性を、彼はもうほとんど考えていなかった……」[25]と書いたラダッツが言うように、この作品は、真にハインリヒ・ベルの遺書というべきだろう。

本論の最初に引用したジークフリート・レンツは、ベルを「一つの時代に生きることを課題と感じていた人」[26]と呼んだが、そのようにして時代を生きたベルが、その生涯の最後に当たって、書かずにいられないことを、書かずにいられない形で書いたのがこの「遺書」であるというほかないのではないだろうか。

(1) Wallraff, Günter: Kein Abschied von Heinrich Böll.
この追悼講演は、後段で言及するもう一つの講演 Vorm-

weg. Heinrich: Heinrich Böll, der Schriftsteller と共に公刊されたテキストはなく、報道機関に配布された原稿があるだけである。従って、出典を詳細に表記することができない。なお、この原稿その他の最新資料の入手については、ケルン在住で Deutsche Welle 放送に勤務する長友永井潤子氏に負うところが多い。ここに記して心からの感謝の意を表する。

(2) 『ハインリヒ・ベルの作品における戦争と戦後の体験について』(日本独文学会編『ドイツ文学』三四号。一九六五年)

『ハインリヒ・ベル再論』(『一橋論叢』五九巻四号。一九七八年)

『一九七〇年代のハインリヒ・ベル――《行き届いた管理体制》を中心に――』(日本独文学会編『ドイツ文学』七二号。一九八四年)

『ハインリヒ・ベルの死』(日本独文学会編『ドイツ文学』七六号。一九八六年)

なお、右のうち最後に挙げたものは、『マルジナリア』欄所載の小文で、紹介記事的な性格もあるため、本論文と内容が一部重複する。

(3) Lenz, Siegfried: Der große Kumpel. In: »Der Spiegel« vom 22. 7. 1985.

(4) 同右。

(5) Raddatz, Fritz J.: Abschied vom Nobelpreisträger für Literatur. Der Tod einer Instanz. In: »Die Zeit« vom 19. 7. 1985.

(6) Görtz, Franz Josef: Heinrich Böll――mehr als ein Dichter. In: »Frankfurter Allgemeine Zeitung« vom 17. 7. 1985

(7) „Wer sagt uns nun die Wahrheit?" In: »Kölner Stadt-Anzeiger« vom 23. 7. 1985.

(8) Reich-Ranicki, Marcel: Dichter, Narr, Prediger. In: »Frankfurter Allgemeine Zeitung« vom 18. 7. 1985.

(9) Kaiser, Joachim: Leiden und Größe Heinrich Bölls. Zum Tod des bedeutenden Schriftstellers. In: »Süddeutsche Zeitung« vom 17. 7. 1985.

(10) Reich-Ranicki, Marcel: Ein letzter Abschied von Heinrich Böll. Aus Anlaß seines Buches „Frauen vor Flußlandschaft", eines in Wahrheit nicht mehr abgeschlossenen „Roman in Dialogen und Selbstgesprächen". In: »Frankfurter Allgemeine Zeitung« vom 8. 10. 1985.

(11) Böll, Heinrich: Die Unkenntlichen. In: »Frankfurter Rundschau« vom 8. 6. 1985.

なお、この記事の入手ならびにその意味の重さについて注意を喚起していただいたことに関して、永井清彦氏に深く感謝したい。

(12) 一九八二年一一月一六日から一九日にかけての »Kölner Stadt-Anzeiger« および »Kölnische Rundschau« の

記事による。

(13) Zehm, Günter: Als Adam ausgesetzt im Tal der donnernden Hufe. In: 》Die Welt《 vom 17. 7. 1985.

(14) Vormweg, Heinrich: Heinrich Böll, der Schriftsteller. この追悼講演については、注（1）参照。

(15) Görtz, Franz Josef: Der redliche Erzähler. In: 》Frankfurter Allgemeine Zeitung《 vom 18. 7. 1985.

(16) Böll, Heinrich: Ein- und Zusprüche. Schriften, Reden und Prosa 1981—1983. Köln, 1984. 八五ページ。

(17) 同書八八ページ。

(18) 注（1）参照。

(19) Böll, Heinrich: Frauen vor Flußlandschaft. Köln, 1985.

なお、以下この作品からの引用は、括弧内の漢数字によってページ数のみを示す。

(20) Zehm, Günter: Vom Grafenschloß in den Wohnwagen. Bölls nachgelassener Roman über das politische Bonn. In: 》Die Welt《 vom 24. 8. 1985.

(21) Reich-Ranicki: Ein letzter Abschied von Heinrich Böll. 注（10）参照。

(22) 発言の内容についても、たとえばベルは、一九八五年六月一一日の、NDRの女性レポーター Margarete Limberg とのインタビューで、工業や銀行などの経済界の支配力は敗戦によってもまったく損われなかったことを指摘したあと、「私が言いたいのは、政権を握っていること (Regierung) ではなくて、支配していること (Beherrschung) なのです」と語っているが、これは次のクロフシュの言葉にほとんどそのまま表現されている。

「彼（主要な政治家の一人ブラウクレーマー）は君が考えるほど駄目な奴じゃない。ブルカンスキーも、まあ駄目な奴だったわけだ。でも、ブラウクレーマーだって失脚するだろう。転落するだろう。ところが、政権を握っている (regieren) のではなく支配している (beherrschen) 紳士方だけは、決して転落しないだろう。決して失脚しないだろう。」（一二五）

なお、右のインタビューについては、次の冊子による。Heinrich Böll. Zu seinem Tode. Ausgewählte Nachrufe und das letzte Interview. Inter Nationes Bonn, 1985. 一一五ページ。

(23) Kaiser, Joachim 注（9）参照

(24) Böll, Heinrich; Frankfurter Vorlesungen. Köln, 1966. 九八ページ。

(25) Raddatz, Fritz J.: Seelen nur aufgemalt. Heinrich Bölls Bonn Roman „Frauen vor Flußlandschaft". In: 》Die Zeit《 vom 11. 10. 1985.

(26) Lenz, Siegfried 注（3）参照。

（一橋大学教授）